

第607回 新潟放送番組審議会 議事録

審議番組

ラジオ番組

「母の日に想う 横田早紀江さんの祈り」



平成 27 年 5 月 27 日

BSN新潟放送

第607回新潟放送番組審議会

1. 開催日時 平成27年5月27日（水）午前11：00～

2. 開催場所 新潟放送本社 6F会議室

3. 委員の出席

○委員側出席者(敬称略・順不同)

委員長	松川公敏	副委員長	相羽利子
委員	正道かほる	委員	古賀豊
委員	小島良子	委員	佐々木広介
委員	佐藤元	委員	佐藤明
委員	細田康		

○委員側欠席者

委員 高井盛雄

○放送事業者側出席者

社長	竹石松次	専務	梅津雅之
営業局長	斎藤和利	編成局長	島田好久
報道制作局長	太田志信	ラジオ本部長	高坂元己
〈説明員〉報道制作局情報センター			
アナウンス担当 田巻直子			

事務局

事務局長 増山由美子 (広報部長)
事務局員 丹羽崇 (社長室長)

4. 議題 1. 報告事項 6月の新番組・単発番組について

2. 審議番組

ラジオ番組 「母の日に想う 横田早紀江さんの祈り」 (48分番組)

放送日時 5月10日（日）16：00～16：50

5. 議事の概要

各局長からの6月度番組報告に続いて、5月の審議番組「母の日に想う 横田早紀江さんの祈り」について、審議が行われた。

～番組審議委員の主な意見・質問～

- ラジオ番組を聞くのは久しぶりだったが、安心して聴かせてもらった。拉致のテーマが先に出てくると、何か重くのしかかり、心が暗くなるが、今回は母の日に想うというテーマの選び方が良かった。インタビューを担当した田巻アナウンサーの姿勢や人柄が出ていて、深く優しく横田さん一家の言葉を引き出していた。めぐみさんが桜の木の下で撮影した写真はさみしい印象があったが、この番組を聴いて撮影の前の日に風疹にかかったりして嫌々撮っていたというのが分かった。
- これまでの拉致問題の番組とは全く視点が違っていた。私生活で子供を持つ田巻アナウンサーがインタビューしたこと、とても自然な感じが出ていて、その空間に聞き手の私達と一緒に居て、話を聞かせてもらっているような、静かな時間が流れていた。横田夫妻の人柄が良く出ていて、共感できたり、違った形で拉致問題を捉えることができた。横田さんの 1997 年当時の声と今現在の声を聴き比べて、歳を重ねていろんな意味で疲れていることが分かる。以前は子供を取り戻す気持ちが前面に出て力があったが、今は声のトーンや元気さが下がっているのが、ラジオだから伝わった。
- 拉致というかなり重いテーマを母の日の日中の時間にラジオで聴かれた方はどんな印象をもたれたのだろうか。番組の構成として、最初に普通の母と子の思い出話から入ったのは良かった。思い出話の声は楽しそう、そのあとめぐみさんの捜索話は本当に辛そうな声、そして、孫にあたるウンギョンさんの話はまた違う声と、テレビとは違う印象を受けた。横田さんは年齢を重ねて、声の張りに時間の長さを感じる。これも声から分かるラジオの力。様々なエピソードを初めて耳にする若いラジオリスナーの方々にとって、拉致問題を考える良い番組だったと思う。
- 日朝再調査一年を前に、しかも、母の日というタイミングでの放送は良かった。テレビと違うラジオの可能性を深く感じた。テレビでは必ず字幕が入って詳しく伝えるが、それができないラジオはいかに工夫して聞かせるか、今回はそれが自然になされた。18 年前の声との違いが訴えかけてくる。全体としてラジオの可能性を私達に教えてくれた番組。
- 録音した番組を 6～7 回聞いた。最初に聞いた時は重すぎて、母の日の番組として消化しきれなかった。拉致は多くの県民の心に深く刺さって、私にとっても大きな事件。我が事のように思う自分がいる。母のもつ愛情を改めて感じさせる番組。
- 最初はなぜ母の日なのか疑問に思ったが、番組の内容については何も言う事はない。中学生の子供を持つ田巻アナウンサーの母親としての気持ちが伝わってきて、語りが素晴らしかった。およそ 40 年間、めぐみさんは日本で良い時期を過ごせず、早紀江さんはつらい気持ちだったと思うが、インタビューでは辛いことを聞かない、番組が成立しない。早紀江さんが、母親として事件を風化させない思いを感じた。地元の報道機関として拉致を風化させない気持ちをもって、解決にむけて駒を進めてほしい。
- 最初に聴いて感じたことは「番組」を聴いたというより、まさに「横田さんご一家の声」をストレートに聴いたということ。横田めぐみさんの弟のことが一番気になっている。姉の不在をかかえたまま大きくなつて、両親の体が動かなくなると活動を引きつぐのか、今後どう動くのか印象深い。

- 拉致という重いテーマだが、母の日に狙いを合わせた番組で、出だし、プロローグから非常に良かった。横田さん一家の日常を正面からとらえていて、笑いが醸し出される場面もあって、いやされる番組だった。番組内で流れる歌も素晴らしかった。拉致現場周辺の地域では、いまだに拉致が起きた海岸に子供を1人で通わせるのが怖い親がいる。事件は風化していない。今回、テレビではなくてあえてラジオを選んだ理由をぜひお聞きしたい。
- 母が子を思う愛情がひしひしと伝わった。早紀江さんはめぐみさんことを毎日思い出して、思い出が薄れていない。日常の小さなエピソードを描いたことで胸を打つたが、感傷に流されず、早紀江さんは毅然として立派だった。母は強し、と思った。何かの折々に拉致を報道してほしい。横田さんのご自宅での取材・録音だと思うが、夫妻の実感が伝わってきた。
- 拉致問題は重いが、正面からとらえず、母の日に母親の視点で、すばらしい報道になった。被害者家族にとってあつという間に一年が経ったが、拉致問題は全く進展ない。相手国事情もあるが、解決に時間がかかる。ラジオの特性は何かをやりながら聴けることだが、今回に限っては何かしながら聞くことは失礼。これまでとは違う視点でラジオの可能性をとらえて、今までの枠を超える番組ができた。これからにつながっていくと思う。番組内に流れた曲名が分からなかつた。

～制作担当・田巻アナウンサーから～

お忙しい中、しっかりと聴いて頂き、幸せです。

- 私が作りたかった番組で、やりたいことをやらせてもらった。ラジオなら一人でインタビューがとれる。
- 横田さんとは、数年前の拉致県民集会で出会った。その時、母の日に早紀江さんを応援する集会が開けないかなどと思うようになり、何か形になつたらよいと考え、私の息子が中学生になったこと也有って、番組制作に手を挙げた。先輩や上司が後押ししてくれた。
- 普段の会話のようにインタビューさせて頂いた。報道担当の同期とラジオ制作担当の同期と3人で相談して作った。構成は考え抜いたものではなく、偶然の産物のところもある。横田さんは普段から街の方々に感謝の挨拶を欠かさず、その素晴らしさに触れられて、伝えられて、幸せでした。母の日に県民のみなさんに聞いて頂きたかった。
- テレビでは早紀江さんのコメントを切り、そぎ落としてしまい、強い人との印象が残るが、ラジオでは2分、3分と早紀江さんの言葉を流すことができる。ラジオは語りかけるもの、耳を傾けてもらうには良かった。
- 番組内では岩渕さんご夫妻が作った「コスモスのように」を使った。これは拉致関係の色々な会が開かれると、会場で流れていた曲。